
伯爵令嬢の不都合が良い家族環境。

柚吹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伯爵令嬢の不都合が良い家族環境。

【Nコード】

N 6 2 2 1 X

【作者名】

柚吹

【あらすじ】

伯爵令嬢のローディアは過保護な父、兄、弟に囲まれている。

が、ある日、はたと気づくのである。

いつの間にか嫁ぎ遅れているのではないかと。これではいかんと思いつが、過保護な家族はローディアの邪魔ばかり。本人には悪気はたぶん、あくまでもたぶん無いだろうけど、少しは自由にしてほしいのである。何分年頃の乙女（？）だし。

そんな中、ローディア宛に届いた舞踏会の招待状。兄等が破り捨て

る前に、横撮りして、必ずや、格好良くて優しくて気遣いのできる
素敵な彼氏をゲットするのだ！

過保護な、父と兄三人と弟一人に囲まれた、伯爵令嬢の奮闘記。目
標は素敵な彼氏。打倒家族。

一話・伯爵令嬢の現在状況

「……はあ」

伯爵令嬢——ローディア「リスティカ」ファステラーは憂鬱だった。

と云うのも、健全なる乙女齡十七にして、婚約者どころか好きな男性がいなくて、どうなのだろうか。世間一般では、嫁ぎ遅れたうら若き乙女というのか。

別に早く結婚したいわけではない、断じて。ただ、ある友人がこの間、冷めた目をして云っていたのである。

曰く、「ローディアは彼氏とかいないわけ？　まあ、あんな格好いい兄弟に囲まれてるんだから目は肥えてるだろうから、相手はなかなかいないだろうけどねぇ」

婚約したての、幸せ感溢れたピンク色のオーラを出しながら、彼女は嫌みっぽくそう云ったのである。全く、余計なお世話ですよ！と声を大にして云いたい。

只でさえ、過保護な父と兄と弟に囲まれているというにもかかわらず！

大体において、外に行くにも家族全員の許可を取るとか無理な話でしょう。おまけに、ついて来るとか云い出す始末。一番まともに見えるディード兄様でさえ、外出には眉をひそめる。

後少しで嫁ぎ遅れとも云うのに、少しは出会いを求めても良いでしょう、全く。たかが娘一人にそこまで神経使わなくてもねえ。

おまけに、貴族の集まりともいうべき舞踏会の案内でさえ破り捨てている始末。それもなぜか私のだけ。私、実は過保護にされてるんじゃないくて、虐められてるのかしら。とか思うじゃないの。まあ、

それはないけど。

母とは十三年前に離婚した父。原因は母の相次ぐ浮気。貴族ならあり得る話だけれど。実際異父の兄弟がいるとか何とかお兄様達と話していたのを聞いたことがある。

離婚した父は子供を全部引き取って、男手一つで育ててきた。中でも唯一の女である私だけには甘かった（外出等については数倍厳しかったけれど）。兄が三人と、弟が一人。完全に男に囲まれて、育てられた私。

気づいてみれば、なぜか、家族は私だけに対して過保護だった。

一話・伯爵令嬢の現在状況（後書き）

かなりずれた、伯爵令嬢の健気な奮闘記です

よろしくお願いします

二話・兄等の説教と令嬢の外出

「ローディア、外出の時は声をかけると何度も云ってるだろう？」

眉間にしわを寄せたマイブラザーは、過保護丸出しで説教の決まり文句を云う。正直、いい加減聞き飽きたけど。

「フィリップ兄様もファルトナー兄様も忙しそうだったわ」

私の位置から右側に立つ金髪碧眼のイケメン——フィリップ兄様。ファステラー家長男にして二十八歳の既婚者。であるにもかかわらず、妹の行動を目聡く口出すシスコン。私よりもルーズさん（妻）の方にもっと気を配るべきだと思う。云わないけど。

一方の左側に立つ金髪藍眼のイケメン——ファルトナー兄様は三男にして二十一歳。こっちは婚約中。さっさと結婚してリフィナさん（婚約者）を幸せにしてあげればいいのに。これも云わないけど。

「それでも、だよ。たとえ僕らは忙しくてもローデを一番に優先するよ？ もっと兄を頼っていいんだよ？」

……うぜえええ。

私を優先ではなく、つきあってる方を優先するべきでしょう。折角、政略結婚じゃないというのに。

……てか、二人ともルーズさんやリフィナさんのこと愛してるんですよね？ そうですよ、そうですね。実は心の中では恋人一筋なんです、きつと！

「いいかい、ローデ。必ず誰かに声をかけてから出かけるんだよ。」

僕らがいないときは外出なんてしないこと。

まあ、暫くはディードが帰ってくるから、ディードを頼るんだよ？ あ、でもでも、どうしてもって云うなら、僕らはいつでも相談に乗るからね？」

……早く終わらないかしら、この説教。毎回毎回同じ様なことを云われても説得力に欠けますよ、全く。大体、伯爵令嬢とはいえ容姿は中の下、世間にもあまりでないような私に誰も興味持たないってーの。

兄様達は皆揃いも揃ってイケメンなのに。中身がこれじゃ悲しすぎるわ。せめて、妹離れしましょうよ、ねえ。

と、そんな愚痴紛いなことを頭の中で思っていると、不意に部屋の扉が開く。

「……何だ、こんなとこにいたのか」

うちの中での唯一の常識人——ディード兄様だった。ディード兄様は学者の卵とも云うべきお方。お国の王様に認められている、貴族の鏡。中身もまともだしね！

ファルトナー兄様と同じ藍眼（遣伝子かしら？）に、私と同じブラウンに近い金髪。ファステラー家の砦とも巷で云われている（らしい）。次男にして二十四歳。何故か婚約者もつきあってる人もいない。

「ローデの説教なら、もういいだろう？」

ローデもこれから気をつけるんだぞ」

「はい、ディード兄様」

ああ、ディード兄様が救世主に見える。ほんと、頼りになる本来の兄の姿よね、これが。

「ローデは外出したいんだろう？ フィリップには話があるから、ファルトナーかヴァインを連れて行きなさい。」

「帰りは遅くならないように気をつけることが約束できるなら、行つてらっしゃい」

「わかりましたわ、お兄様。できるだけ早く帰ります。行つてきますわ。」

ファルトナー兄様、付き添いよろしくできまして？」

「勿論だよ、ローデ」

そう、出かけようと思つて外にでた瞬間に、あの兄様に捕まつたんだわ。そして今に至る。

出来れば付き添いはディーダ兄様が良かったんだけど、まあ、ファルトナー兄様でもいいか。ファルトナー兄様は基本的は静かで優しいし。基本的には、ね。

それよりも、フィリップ兄様とディーダ兄様の話つて何かしら。

気になるけど、今は外出が先よ！ なんとつて、今日リニョーアルオープン洋菓子屋・カルファのお菓子をかうんだから（リニョーアルの前にも美味しいって評判だと兄様から訊いたわ）！ もちろん、ファルトナー兄様にも手伝つて貰うわ！

レッツ、洋菓子屋・カルファ！

二話・兄等の説教と令嬢の外出（後書き）

えっと、こんなもんですかね？

間違いがあつたら教えていただけるとうれしいです

ローディア嬢は結構口が悪いですけど、兄ってこんな感じかな……

三話・兄の会話と父の不手際

ローディアがファルトナーを連れて、洋菓子屋・カルファに向かった後。

「ディード」

フィリップはローディアの時の態度とは打って変わって、据わった眼でディードをみた。

「今はそれどころじゃない。云いたいことは分かるが、話は父上の書斎で話す」

ディードは来いとばかりに、くるりとフィリップに背を向けると部屋を出ていく。フィリップは厳し（いかし）ぶりつつ、ディードに続いて父の書斎へと向かう。その間の道のりはほんの僅かであるが、フィリップにはとても長く感じられた。もちろん、その間の会話はいつさい無い。

「父上、ディードです」

ディードは軽くノックすると返事を聞くことなく扉を開く。

部屋の中には、堂々とした威厳のある父の姿——はなく、どこやら届いた手紙を手をめそめそとハンカチを片手に涙ぐんでいた。その隣には家令の姿があり、嘆く伯爵を励ましていた。

「……………」

「父上、フィリップを連れてきました。」

——だから早くその涙目やめろ」

フィリップは父の涙ぐむ姿に絶句し、ディードは冷めた目で父の顔にハンカチを押しつけた。父の威厳など一切見あたらない。

「……ディード、私の傷ついた繊細な心を大切に扱おうとする思いやりはないのかい」

伯爵——ゴートはか細い鼻声でつぶやくと、ディードから鋭い睨みが飛んできた。

「貴方がしっかりとローディアの害虫駆除をしていれば、こんなことにはなりませんでしたが？」

「おい、ディード。そろそろちゃんと説明しろ」

機嫌が悪いディードに向けて、しびれを切らしたフィリップが問うと、ディードはゴートの持っていた手紙を奪い取り、フィリップに押しつけた。読め、とばかりに。

「グランス侯爵から？」

フィリップは封筒の蠟と家名を見る。

差出人は、ヴィルディアー＝ル＝グランス。爵位は一つ上の侯爵だ。

「ローデ宛の、招待状だ」

苦虫を噛み砕くように、苦々しい表情をしたディードは、未だに涙ぐんでいるゴートを睨む。

「し、仕方ないだろう？ グランスとはいえ、一つ分身分が高いんだ。手の打ちようも限られてくるんだ」

ヴィルディアー「ル」グランス、といえば、ゴートを含めたファステラー家には苦い思い出——記憶と云うべきか——があった。

それは、ゴートの若き青年時代に遡る。当時、ゴートは騎士兵としてとても優秀で、若輩者ながらも多くの兵士たちに認められていた。貴族の出ながらにして、気取らなくサバサバしている性格が仲間たちと穏和な関係を作っていた（余談だが、当時から泣き上戸だった）。

一方の、グランスも騎士兵ではあったが、侯爵家の嫡男で、わがままな性格で、現在の地位も金があるからこそ、と云われている。そんな中、ゴートには許嫁がいた。とても美しく、性格も良かったという彼女。

貴族社会には珍しい相思相愛で、とても仲がよかったという。ただ、二人が結ばれることはなかった。片や思いやりのある青年、片や我が儘三昧の成金主義。グランスは金とその権力で、ゴートの許嫁を奪ったのだ。さらに、遊ぶだけ遊んで、彼女は捨てられたのだ。それも、無残に。捨てられた彼女は悲しみに暮れ、貴族社会から姿を消した。

それ以来と云うもの、ゴートとグランスは仲が悪かった。

更に、ゴートの妻であり、フィリップ、デューダ、ファルトナー、ローディア、ヴァインの母である、エリネアはグランスとも子を成していると云う。もちろん、隠し子の類だが。

以下、伯爵ゴートと侯爵グランスとの因縁は続いている。

「あの屑、俺の妹にまで……」

機嫌が最悪なまでに急下降しているデューダは目が据わっている。

それも、暗くて黒い寒気のあるオーラ付きで。

一方のフィリップはというと、招待状をじっくりと読み返した後、さわやかに笑って、招待状を破り捨てた。その後に、「招待状は風にとばされて届かなかった、ということ。まあ、破いてしまったし」と云つてのけた。

書斎の気温が寒さを増していくような錯覚に陥ったのは家令で、彼は無言のまま、生暖かい眼でファステラー家の面々を見ていた。

「俺は仲間に頼んで、グランスに着いて調べると同時に信用できる伝手を探す」

デューダはそう云い残すと、自室に引きこもってしまった。

彼は学者の卵であり、ローディアの憧れだ。そして家族の中で唯一、表と裏の顔を分けている。ローディアの中ではまともな兄ではあるが、実際は家族の中一番の過保護でシスコンだ。更に、他方に顔が利くため、情報操作が長けている。

今までの、ローディアに寄り付く害虫駆除も彼が行っていた。彼がローディアに近づくことを赦したのはローディアの幼なじみと、信用できる友人数名のみだ。

「……招待状を持ってきた使者に、少々の融通を利かせて起きなさい」

デューダが出て行った後、ゴートは家令にボロボロになった招待状を示した。

「畏まりました、旦那様」

家令は僅かに頭を下げると部屋をそそくさと出ていった。

「……父上」

「分かってるよ」

フィリップが咎めるように云えば、ゴートは肩をすくめた。ゴートは鼻声のまま、袖からある宛名の書かれた手紙を出した。

その手紙をフィリップに差しだし、再びハンカチを目頭に押しつけた。

「確かに、預かりましたから。

——王宮行き、緊急機密援助申し出」

ぼそりとフィリップは呟くと、手紙を仕舞った。

ゴートが僅かに頷いたのを見て、フィリップも書斎を出た。

三話・兄の会話と父の不手際（後書き）

遅くなりました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6221x/>

伯爵令嬢の不都合が良い家族環境。

2011年10月23日19時17分発行